

学校には帰ったが何もすることがない。友達とむしろ持って行って運動場の  
大穴の縁から底まで代わる代わる滑って遊んだ。底から上を見ると空だけしか見  
えなかった。滑り降りるのはいいがまた登って行くのがたいへんである。30度近  
い斜面だったろう。でも、飽きもせず何度も繰り返した。破壊された偕行社の跡  
も入り放題で、焼けた小銃弾が無数にあった。中には機関銃弾らしきもので交  
じていた。珍しいので家に持って帰っては叱られたのをおぼえている。校舎の  
内部が焼けなかったので、設備は殆ど残っていた。理科準備室も入り放題、標  
本の骸骨がぶら下がっている。手を外してきて友達の首筋を撫でて楽しんだ。ま  
た大きな瓶に水銀が沢山入っていた。ころころ転がるのが面白く、机の上を転が  
して遊んでいた。ひょっとしたら今、からだのどこかに沈んでいるかも知れない。

### 後日譚

あれだけの爆撃を受けながら学校が焼けなかったのは、当時の山口校長先  
生や職員の方々の献身的な御努力があったからだに聞いている。

運動場の巨大なすり鉢はいつ埋め立てられたのか覚えていない。ゴミを埋め  
たのかも知れない。そのせいか、あの辺りはその後長いあいだ水はけが悪く、運  
動会の時の父兄席にはいつも椅子が必要であった。

校舎の屋上の穴は永く処理されず残っていた。5年生の時だったか、丁度そ  
の穴の下に席があり雨が降るたびに机ごと移動させられた。

### ▶ 授業

戦後の混乱のせいで生徒は多数入れ替わっていた。疎開先からそのまま転校  
してしまったり、戦後になってから編入した人、消息不明の人々等々。疎開前3つ  
あったクラスは2つになってしまった。授業と言っても教科書も何もない。担任の  
阪口先生は仕方なく「子供の科学」という雑誌を買ってきて教科書の代わりにさ  
れた。その時「鉱石ラジオの作り方」等を教えて頂いたおかげで私はラジオ少年に  
なってしまった。

突然「民主主義」の世の中になったが、本校の教育の基本姿勢は変わらな  
かったと思う。例えば運動会の「造形体操」はそのまま続けられた。私達も先輩と  
同じように五人扇やピラミッドや銅像や鎖を造った。

## 世相

### ▶ DDT

街は着のみ着のままの人がいっぱいだった。阪急電車の梅田駅には米軍人と  
何人かの日本人が立っていて、DDT(殺虫剤、発癌性があるといわれ今は誰も  
使わない)の粉末を入れたポンプを持って乗客のえり首や頭から容赦なくぶっか  
けた。皆真っ白である。しかしおかげでノミやシラミは少なくなった。

### ▶ 闇市と買出し

当時は大人も子供も年寄りも皆同じように汚く、飢えていた。戦後すぐ極端な  
物資不足に伴って各地に続々と闇市が誕生した。一寸したターミナルにはその  
規模に応じた闇市が出来ており、そこでは金さえ出せば何でも手に入った。イン  
フレが急速に進み、昨日と今日で物の値段が違うなどというのは日常茶飯事であ  
った。「甘いあん餅どうですか、ひとつ10円、どうですか」オバサンが汚れた手で  
売っている餅があくる日行くと15円になったりしているのは少しも珍しい事ではな  
かった。

タバコは配給制で、葉と紙が別々だった。それを手巻きにして10本ずつ束ね  
て売っていた。一本一本太さが違っても誰も気にしなかったし、子供にも売って  
くれた。闇市のまわりにはいち早くパチンコ屋が出来たが、子供がパチンコをし  
ても、景品にタバコを貰っても誰も何も言わなかった。タバコを貰って仕方なく祖母  
の土産にしたりした。

深刻なのは食糧の不足であった。皆、家に残っている着物や家財道具を持  
って満員電車で鈴なりになって田舎のお百姓さんの所へ行き、頭を下げた米や野  
菜と代えてもらった。しかしターミナルでは警官が待ち受けており、折角苦労して  
交換してきた物を片端から没収していた。泣くに泣けない光景だった。子供も当  
然こういった買出しに動員された。

### ▶ 進駐軍

鬼のように教えられていた米軍兵は、案に相違して皆背が高くびつりの服  
を着て清潔で颯爽としていた。子供達があとを追いかけては厚かましくチョコレート  
などをねだっていた。彼等は優しくしたが規律正しく、毅然としていた。ついこ  
の間まで敵であったというような警戒感など全く感じさせなかった。ジープに乗っ  
て来る姿が又洒落ていた。連合軍は、わざわざ日本軍と実戦経験のない連中を  
進駐させたという話をあとで聞いた。米兵が学校に入って来たことはなかった。

### ▶ 車外乗車

昭和21年、京阪関目から通学するようになったが、これが又大変だった。各  
駅停車は2、3両編成の木製のボロ電車であつた。勿論自動扉などはない。朝夕は通勤  
通学者でいつも超満員、乗りきれずにドアの外やバンパー(これがけっこう広かっ  
た)にぶら下がって乗る。「車外乗車はやめましょう」という一見何の事かわからな  
いポスターがあちこちに張ってあった。電車がのろいので振りおとされずに済ん  
だのだろう。何台待っても乗れない時は守口あたりまでさかのぼって乗ったりもし  
た。妹と一緒に通学するようになってからはお守り役になった。押し合いへし合い  
の車内では小さな子は見えなくなってしまい、どこにいるのかわからなくなる。声  
を頼りに妹を探して、押さないでくれと周りの大人たちに頼んだものだ。大切な理科  
の宿題など、天満橋へ着く迄に全く原型を止めなくなっていた。超満員の車内で  
両足を上げてても体はそのまま下へ落ちなかった。乗客は皆上手にすし詰めにな  
っていた。駅で止まると、ドアのそばの人は順次降りて先へ並び降りる人を通  
した。中で詰まっている人々は歯車のように回転して降りる人先へ送った。今  
の人々は、入口を占拠して、乗り降りの人があつても譲ろうともしない。

## 再び学校の事

### ▶ 二度潰れかけた追手門

戦後、陸軍の解体に伴って偕行社も解散させられ、関連があつた偕行社学院  
も当然解散の憂き目を見ることになった。しかし、教育の場をどうしても存続させ  
たいという保護者、先生方の強い要望から「錦城育英会」が立ち上げられたが、  
これ又偕行社のにおいがするという事で解散させられ、「財団法人大手前学  
園」が再度立ち上げられた。このあたりの事情及びその後の動向については、  
学院発行の各年誌に詳しい。

大切な事は、当然潰されてもおかしくなかつた学院を、悪くいえば当時可能なあ  
らゆる手段を使い、あらゆる苦難を乗り越えて、ともかくも途切れることなく存続さ  
せた方々の努力に何をおいても感謝すべきであろう。このあたりの事情は、学院  
の暗い部分として評価されなかつたきらいがある。しかし、これなくして今日の追手  
門は存続し得なかつたことを我々は改めて銘記すべきであると思う。

### ▶ 苦肉の策バザー

極度のインフレであつた。預金の封鎖などということもあつた。たとえ少々金があ  
つても物資が絶対的に不足していた。買い出しや、その日その日の仕事で懸命  
に生きていた時代だ。学校は存続したものの、先生方の給料が出せない。何  
とかせねばと父兄が知恵をしばって家に残っている物を学校へ持ち寄って売り、  
先生の給与の足しにした。これが今に続くバザーの始まりであるとされている。

### ▶ 西の丸の石垣

校門の前は濠を隔てて西の丸で、石垣がこちらへ張り出している。崩れた石  
垣や「乾の櫓」は長い間そのままだった。門の前の堀端から西の丸の石垣に向  
かって石を投げ、遠投を競った。石垣は案外遠く、石は届きそうでも届かなかつた。

### ▶ 先ずボールありき

戦後一時スポンジボールが流行った。何を転用したのかわからないが、厚さ1センチ  
位のスポンジを積層してボール状に加工したものだ。これがびっくりするほどよく弾む。早  
速「壁野球」というのが発明された。詳しいルールは省略するが、壁の前の地面にボー  
ルをぶっつけ、それが壁にあたって跳ね返ってくるのをキャッチしてアウトをとる遊びであ  
る。休み時間は殆ど壁野球だった。そのうち軟式野球ボールが現れると、これとグラブの  
セットがまたたく間に流行した。皆親にねだってグラブを買ってもらった。「壁野球」は一